

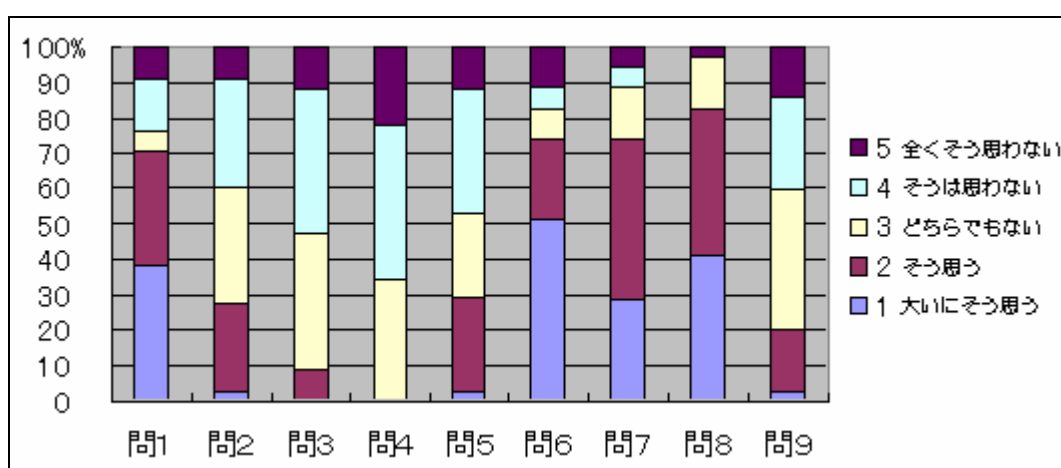
2005年12月19日～22日の17時～19時に、総合教育学研究棟2号館南側の小径に電飾を施し、道行く人にプロジェクトのパンフレットを配るイベントを実施した。この企画に関するアンケート調査を2006年1月13日に実施した。アンケートは下記10問からなり、問1～9までは5段階評価でをつけてもらい、問10では自由回答してもらった。なお、本アンケートは「学習指導と学校図書館」の授業時間内に実施した。

質問

1. 学芸の森プロジェクトを知っている。
2. 学芸の森が整備されていると思う。
3. テーマゾーンごとに整備されている。
4. 水辺の環境整備がなされている。
5. 自然環境の教育的利用がなされている。
6. クリスマスツリー企画があったことを知っていますか。
7. クリスマスツリー企画に賛成である。
8. 土いじりは楽しい、または大切だと思う。
9. 学芸の森プロジェクトに参加してみたいと思いますか。
10. 学芸の森プロジェクトに関して何かご意見がありましたらご記入ください。

結果と考察

43名からアンケートを回収できた。結果を下のグラフに示す。



【問1】学芸の森は約7割の人が知っているという結果が得られたが、これはアンケートを実施した授業で、担当の前田教員が学芸の森プロジェクトについて紹介していたことに因るとこ

ろが大きいと思われる。このため、もし大学の学生全体でアンケート調査を実施した場合、学芸の森プロジェクトの実質的な知名度は、かなり低く示されるものと予想される。また、学芸の森プロジェクトの名前だけでなく、組織構成や活動内容を知っている学生は、さらに少数であると思われる。今回の「光の小径企画」(計画当初はクリスマスツリー企画と呼ばれた)における学芸の森プロジェクトの紹介も不十分ではあったとはいえ、今後、学芸の森プロジェクト自体がより積極的に広報活動する必要があると思われる。

【問2】学芸の森が整備されていると感じている学生は3割にも満たない。学生が期待する整備の内容や程度は不明であるが、現状は学生から見るとやはりよくない環境であると思われる。

【問3】テーマゾーンごとの整備に対する質問だが、テーマごとの整備がされていると答えた人は1割に満たない。おそらく、「そもそもテーマなんてあるのか?」という学生も多いと思われる。テーマゾーンを設定するなら、多くの人が気付くような明確なものを作る必要があるだろう。

【問4】水辺の環境については、整備されていると感じている人は全くいないという結果になった。噴水にしる、万葉池にしる、農園の池にしる、学生の中では評価されていない。今後、学内に新たにビオトープをつくることも大切と考えるが、現在の水辺の環境整備も学芸の森プロジェクトとして早急に解決しなければならない課題の一つである。

【問5】自然環境の教育的利用について質問したが、ここでは他の整備の問題に比べて、ポジティブな結果が得られている。これは、学内の樹木などを扱う授業場面や、グリーンアドベンチャーの存在などが、その理由となっているのであろう。その反面で、多くの学生は鬱蒼と茂る樹木の中へ、自ら何かを見に行こうとしない状況も多々存在するように思われる。今後は授業中だけでなく、随時、学生が何かを感じられる環境を作る必要があるのではないか。

【問6】クリスマスツリー企画は、約7割近い学生が知っており、高い知名度が伺われた。しかし、この知名度が問1での学芸の森プロジェクトの知名度につながっていない。クリスマスツリー企画は学芸の森プロジェクトの広報活動の一環として行なったのだから、もっと学芸の森についての広報をするべきであった。

【問7】クリスマスツリー企画についての賛否であるが、学生の約7割が賛成していることが示された。これに対し、反対は1割程度であった。反対理由として問10の自由回答欄で書かれていた内容を見ると、「そんなお金があるのなら、クーラーなどの生活環境整備に力を入れてほしい」といった、お金の使い道に対するものが多くあった。また、趣旨が分からないなど、この企画に直接反対する意見も見られた。しかし、回答学生の7割が本企画を支持したことは、

学生の大学生生活におけるニーズを考える上で重要なことである。

【問8】土いじりの大切さを否定した学生は5%にも満たなかった。この結果を見ると、昨年度実施したナノハナやムラサキハナナの種まきなどは、一部の運動部の学生だけに手伝ってもらうのではなく、広く呼びかけ多くの人に参加してもらい、問題意識を持ってもらったほうが、今後の学芸の森にとってプラスになったのではないかと考える。

【問9】質問に対し、学芸の森に参加したいと考える人は少ないことが示された。これは、多くの学生は忙しく、参加する時間がとれないためかもしれない。しかし、3%ではあるが、参加を希望する人がいることも事実である。この点に注目し、今後、活動参加メンバーを増やす努力をする必要があると思われる。

(光の小径企画代表：谷脇佳光)